

実践事例

学校名 _____

1 実践の概要

(1) 取り組みのねらい

定期的にいじめに関する調査を行うことにより、いじめの未然防止・早期発見に努める。

(2) 取り組みの内容

① 月ごとのいじめ調査

毎月（月末）、全校生徒を対象に「いじめ調査」を行なう。いじめの被害を受けている生徒については、担任が聞き取り調査を行い、各学年の生徒指導担当者が情報を集約する。

② 生徒指導部会で報告・協議

生徒指導部会（毎週開催、構成メンバー：校長、教頭、生徒指導主事、養護教諭、学年生徒指導）で各学年から調査結果を報告し、対応を協議するとともに、情報の共有化を図る。

③ 学年・学級での対応

生徒指導部会での方針を受け、学年で組織的に指導にあたる。（学年主任・学級担任・学年生徒指導）

④ 経過観察

いじめの被害（加害）生徒については、継続的に観察を行う。特に被害生徒については、翌月のいじめ調査で同様の回答をしていないかどうかを確認するなど、問題が解決されているかどうかを確認する。

2 実践の成果

- アンケート内で、いじめの定義や実際の被害例を挙げているため、いじめに関して間違った認識を持つ生徒が減少した。
- 生徒がアンケートによって被害を訴える場が確保され、安心感を持って学校生活を送れるようになった。
- 生徒指導部会で対応を協議するため、いじめ問題に関して職員間の共通理解が図れ、また、同一歩調で指導にあたることができた。
- 調査結果への対応を迅速に行うことによって、「いじめを絶対に許さない」という教師の姿勢を示すことができている。

3 取り組みの評価

- 開始当初（平成 18 年度）から比較し、調査でいじめの被害を訴える生徒が、いじめの定義の理解によって、大幅に減少している。
- 調査結果から、コミュニケーション能力が不足しているという問題が浮き彫りになった。（思いやりに欠ける言葉や、自己中心的な行動など）今後の課題として、ソーシャルスキルトレーニングを生徒の実態に応じて積極的に取り入れ、他者とよりよく関わっていく能力の育成と、自己と他者の違いを受け入れながら、良さを互いに賞賛できるような人間関係の醸成が挙げられる。

